

## ひとつの推論

佐藤 文子

過日ミンガン大学のステイブンス教授が来仙され、教授たちがペルーで行なった研究について話をきく機会がありました。

それは、学校に通うことが子どもの認知発達にどのような影響を及ぼすか、をテーマとしたもので、ペルーでは六歳児の就学率が53%で、この種の研究には好適の条件をそなえているということでした。子どもの就学については、家庭の社会経済的状況、親の学歴等さまざまな要因が関与しているが、結局学校に通うという要因のみが子どもの認知発達に有意に関係していることが知られたそうです。ペルーの教師の質は知識においてもモチベーションにおいても非常に低く、教育の内容や方法は共に問題にならない程お粗末だということです。それでは学校生活の何が子どもの認知発達を促進す

るのでしょうか。この点について教授は十分納得できるような説明はされませんでした。

私は、ほぼ十年幼稚園教員の養成にかかわりながら次のような事実に気づきました——これは単に気づいたというより私たちの教育実践的営みの反省としてみえてきたといった方がよいかと思えます——それは学生同士の人間関係が良好な学年は、幼稚園での子どもの観察も的確であり、またそれと対応して卒業論文などの成績も概してよいということです。ここで人間関係が良好であるというのは、ただ和気藹々といった雰囲気があるというようなことではなく、互いにそれぞれ

の長所短所を認め合いながら、共に成長するためにそれを

どう活し、補うかについて配慮し合える、互いの短所を指摘して相手を傷ついたり、あるいはひたすらかばい合ったりすることなく、各自のあるがままを受け合っている、そんな関係なのです。

ロージャズはカウンセリングの実践を通して、自分があるがままに受入れる時、その人は変化し、成長することを知りました。自分の中の矛盾や葛藤があるがままに認め、そのような矛盾や葛藤をもつ自分を受入れる時、その人の認知はより現実的となり、現実の要請により柔軟に適応できるようになるということです。ロージャズが個人について記述していることが、学生の集団においてみられるのです。

私はスティブンス教授の話をきき、また私自身の大学での学生や、幼稚園での子どもの観察を考え合せて、同年齢の子どもが一緒に生活すること自体、子どもの発達にとって重要なことなのだと思います。

複数の子どもが一緒にいる、そこに葛藤が生じ、解決していく程度で、子どもの認知は分化し体制化され、より現実的なものになっていく。しかしこれは非常にエネルギーを要することです。ロージャズは前述のような変化が生ずるために

は、個人が先ず他の人から受け入れられているという経験が必要だと考えました。カウンセラーから受け入れられているという安心感、それが不適応状態にある人の情緒を現実にもつて解放するのです。子どもが大人—子どもの人間関係において大人や親や保育者から受け入れられていると感じる時、子どもの心は子ども同士の世界という現実にもつて開かれるのではないのでしょうか。

子どもの認知はバラバラに発達するのではなく、体制化され、しかもそれが固定してしまうのではなく、現実と対応しながら柔軟に変化していくものでなければなりません。このような発達的变化が生じるためには、問題の解決についての方向性のような大人—子どもの関係において大人の価値観が子どもに示される時、子どもはそれにそった解決を子ども同士の横の関係で試みながら、自分たちの価値観を確立するのではないのでしょうか。

ベルーの学校の人間関係がどのようなものかは、はっきりわかりませんが、学生たちの人間関係とそこでの感情と認知の分化、統合の過程を観察しながら、子どもの認知発達の過程を推論してみました。

(秋田大学)